

## 英語学徒 杉豊先生の原点

村 野 坦

杉本豊久氏と私は静岡県藤枝市で小学校から高校まで同じコースを歩んだ。といっても彼は私より学年で9年も後だから一緒に過ごしたことはない。後年、ともに東京で高校の同窓会役員を務めたときに、それを知り親しむようになった。英語、英米文学の教育・研究に携わった同郷の後輩が、どんな環境の中から身を起こし、そこに至ったのか原点を記しておきたい。

私たちの郷里では「杉」のつく姓が多い。杉本のほか杉井、杉浦、杉原、杉村、杉山……。ここでは豊久氏のことを敬愛の念を込めて「杉豊」と呼ばせてもらう。本人自らメールアドレスで「SUGITOYO @」と名乗っていることでもあるから。

### 東海道「藤枝の宿」

金曜の午後、大学の講義を終えると杉豊さんは愛車を駆って東名高速を2時間余り、ひた走り藤枝の実家に帰る。農作業で週末を過ごして東京に戻る。そんな習慣を続けてきた。

藤枝市は、東海道新幹線の停車駅が6駅ある東西に長い静岡県の中ほど、駿河湾から内陸に入った平野部に広がる。新旧東名高速道、新幹線、JR 在来線など東西をつなぐ動脈が市域を横切る。

この地理的条件から地域の歴史は古い。一帯は「志太」と呼ばれ、万葉集に「志太の浦を朝漕ぐ舟はよしなしに漕ぐらめかも よしこさるらめ」

(・・舟は理由もなく漕いでいるのだろうか)の一首がある。律令時代に  
一帯を治めた「志太郡衙(ぐんが)」跡が見つまっている(国指定史跡)。  
近世では東海道53次の22番駅「藤枝の宿」があった。

現在は人口14万6千人余りの中都市だが県都静岡まで車で20分ほどな  
ので、子育て世代を中心に移り住む人が多い。2012年からは3年続けて  
「人口の伸び県内一」になった。気を良くして市は「移住の勧め」の旗を  
振る。歌い文句は「年間平均16・8度の温暖な気候」「人口10万人以上の  
都市で刑法犯罪率が最も低い」、さらには市民の「人柄の良さ」まで挙げ  
「ほどよく都会、ほどよく田舎、藤枝に住もう」(市広報)と呼びかけてい  
る。

2014年に藤枝市は市制60周年を祝った。1954年に「昭和の大合併」で  
藤枝町を中心に周辺6町村がまとまって「市」になった。杉豊さんが小学  
校に入学したところである。

## 代々の農家

杉豊さんの生家は合併町村のひとつである旧高州村高柳にある。家代々  
の農家で父・篤二、母・文子さんの3人の子どもの長男として生まれた。  
下に弟と妹がいる。杉本家は近隣の縁者から「本家」と称される家格で、  
他家に貸していた分を別にして田畑は2ha、山林も所有する大きな農家  
だった。

郷土史によると高州村は古来、西隣りの島田市側に今は寄せられた大井  
川の流域にあった。水域を制御しつつ、この地に新田開発した功労者や築  
堤の跡をしのぼせるものとして兵太夫、与左衛門、築地などの字名が残さ  
れている。

高柳は役場、学校、農協や駐在所など村のセンター機能が置かれた中心  
地区である。生家から歩いて5分もかからない高州小学校は1886年(明

治 19 年)に「高州村高柳尋常小学校」として開校された歴史のある学校だ。杉豊さんも私も、ここに通った。

学校には 1928 年(昭和 3 年)に作られ 80 年以上、生徒たちに歌い継がれる校歌があり、制作当時の村の姿を伝える。一番の歌詞は「垂穂豊けきちまち田に」で始まり「高州の里はうるわしや」で終わる。たいてい校歌の類いは意味、内容よりも「音」から入って頭に刷り込まれる。

実は歌い出しの「たりほゆたけきちまちだに」の意味が長い間、分からないままだった。とくに「ちまちだに」のくぐりだり本稿を書くに当たって、ようやく広辞苑で「千町田」(一面の広い田)を指すことに行きついた。学校にも照会して「豊かに稲穂が垂れる一面の広い田んぼに」の意味であることを確認できたが、電話口の女性校長は「校歌の歌唱指導のとき生徒に歌詞の意味も説明するのですが、確かに難しいですね」と笑いながら話した。

難しいのは言葉の意味だけからではない。「ちまち田」が広がる中に集落が点在していた旧高州村は、いまや住宅や工場群の間に田畑が割り込むような姿に大変化しているからだ。

時を経て高州小学校を訪ねた。校門を入ってすぐ、校舎の前庭に見事なソテツの植え込みが昔のままの姿で残っていた。だが門柱の脇には「海拔 17m、浜岡原発から 27km」のプレートが張り付けられている。大地震や原発災害の危険に迫られたとき、地域住民の避難場所に学校体育館が当てられることを想定して表示したものだ。その現実に戻され、往時を懐かしむ感傷は吹き飛んでしまった。

## 夢は宇宙飛行士

どんな幼少期を杉豊さんは送ったのだろう。私の同級生に杉本家の縁続きで、両親が農作業に出た間、よく「本家の豊ちゃん」の子守をした女性

がいる。彼女は「とても、お利口さんだった」という。

杉豊さんのアルバムの中に幼稚園で劇に出た一枚があった。殿様と家来役の子供がいて杉豊さんは家来、殿様役には私の一家が借家していた元大地主の息子「モリヨシ君」が写っている。「殿様」に「家来ぶり」を聞いてみたが、劇をしたことしか思い出せなかった。

自ら懐かしむ近所の子供たちと遊びはメンコやビー玉、近くの小川での魚取りや水泳ぎ、広い自宅の屋敷内での隠れんぼなど。当時の、この地方の少年たちの遊びだ。

雪が降らない地方の農家にとって1年中、仕事は休みない。長男だから、よく手伝いをした。大人に混じって田植えや稲刈り、冬場の麦踏み、春先、イチゴ畑への霜除けのムシロ掛けといった作業に出た。こうした農業者のDNAは今の杉豊さんに、しっかりと生きている。

小学生時代は敗戦から10年以上たち、日本は成長の坂を上り始めていた。4年生のときクラスで「将来の夢」の作文を書いたことがある。杉豊さんが書いたのは「宇宙飛行士かアナウンサー」。1957年、ソ連が初めて人工衛星「スプートニク」の打ち上げを成功させ、米ソの宇宙開発競争が幕を開けたころだ。それに触発されての「宇宙飛行士」だった。その夢が適うことはなかったが、「アナウンサー」の方は後にNHKテレビの英語会話放送に10年近く出演しているから、それに近いところで実を結んだといえるだろう。どちらもクラスの生徒たちが見た「夢」の中で一番スケールが大きく、杉豊さんが外の世界に目を向ける自我の芽生えを示した出来事だったかもしれない。

小学校から隣り合わせの高州中学を経て県立藤枝東高校へ進んだ。同高は大正年間に旧制志太中学として開校され2014年に「創立90周年」を迎えた。高校サッカーで全国制覇4回を誇る有名校だが「文武両道」を掲げる静岡県中部地区の進学校でもある。

この時期の杉豊さんを知る旧友たちに聞いても、取り立てて印象深いエピソードは残していない。文科系クラブで「地学部岩石班」に入っていたように、手堅い努力型タイプだったらしい。

もうひとつ、中学から高校にかけて部活動にバレーボール（9人制）を選んでいる。バレー選手としては小柄だったから中心選手ではなかったが、その後の活動の基礎体力づくりに大いに役立った。

藤枝東高の中庭に、この地で作家活動をした小川国夫（1927-2008）が母校の後輩を励ます詩碑があり「未知の地平を望む健脚の人よ」と呼びかけている。建てられたのは1984年で杉豊さんが卒業して、だいぶ後のことになるが、その言葉を借りれば、未知の地平を望みながら健脚を鍛えていたころだった。

## 英語への目覚め

杉豊さんが生まれ育った環境で外国人や外国語に接する機会は、まったくなかった。後に深く関わることになる英語に初めて出会ったのは中学校の授業だった。その英語の授業で日本語とは、まるで異なる発音や文法があることを知って「衝撃を受けた」という。

3人称単数の主語の現在形動詞の語尾に「s」や「es」がつくこと、形容詞の比較級、最上級の語尾変化、代名詞の変化形などが、とても新鮮に映った。普通の中学生は、そのようなことに、まず「衝撃」を受けたりはしない。やはり杉豊さんの言語に対する感覚には、特別のものがあつたのだろう。

英語のとりこになった杉豊少年は学校の授業だけでは物足りない。そのころ隣の旧青島町に藤枝東高の英語教員を退職した原崎俊一先生が自宅の2階で中学生に英語を教えていた。「原崎英語塾」は地元の中学の英語の教育力が弱くて生徒が高校進学後に苦労しているから、と町内の有力者が

先生に中学英語の補修を頼み込んだことから始まった経緯がある。だから塾に通える生徒は「町内限定」だった。母文子さんが、先生と、塾に通う生徒の家を回って頼み込み初めて「隣村」からの編入が認められた。

原崎先生は顔立ちから重々しく、西洋文学や音楽にくわしかった。補修授業で折りに触れ、その知識を伝え地方の中学生の視野を広げようとしたようだ。感化を受けて杉豊さんは高校進学後も英語力を上げるため英語と数学の「スパルタ教育」を売りにする別の塾にも通った。英会話のラジオ講座を聞き、時事英語誌「Readers Digest」を読んだ。

藤枝東高では昔も今も受験、進学先に国公立大学を選ぶ生徒が多い。地元の静岡大学が最も多く、静大へ行き教員や公務員、金融機関に就職するのが標準的なコースだ。父親は長男にその道を望んだが、杉豊さんはイヤだった。とかく大勢順応で、土地の言葉で「しょうがないじゃん」と諦めてしまいがちな気風から抜け出したかったという。このときも母文子さんが味方について父親を説き伏せてくれた。

将来を「英語を生かす仕事」に定め、進学先は「東京の私立」に絞った。英米文学研究では定評のある立教大学が選択肢の中にあった。その願いを果たして杉豊さんは英語学徒の道を歩み出すことになる。 完



トラクターで畑へ出勤（2014年9月）



ゼミ合宿を実家で（2014年9月）